

べていたのであろうか。残念なことに記録者の手元控えだったのであろう、利用に供するには当時一般的なイロハ順に配列し直さねばならないはずである。それゆえ平成の実作者からすれば、膨大な人数になる前に、和紙／半紙をバラバラにしてイロハ順等に記載、綴じ直すべきではと、採録中の鴎外館長殿に‘意見具申’し、お手伝いしたくなる。

しかも[B]には、[A]に記載されている朝岡興禎、太田謹、堀直格、黒川春村の、いずれも記されていない。

[D]には、1874(明治7)年、華族堀直明(上記堀直格の子息。双方、信濃・旧須坂藩元藩主)が、父[と本人]の旧蔵書の内、443部(=タイトル)、1,679冊他を《浅草文庫》に寄贈したことが、新蔵本の項に出てくる。現須坂市に残る寄贈日の記録：同年7月31日から遅れること約2ヶ月余、10月13日に示される。内容確認ののちの公的な受贈受理の日と目されよう。2年遡る1872(明治5)年、堀保己一の孫、‘編輯寮十等出仕’/堀忠韶の寄贈(どういう職務だったのだろうか。『扶桑名画伝』の索引2種を編んでいる。1,843部、4,909冊)以後では、最大の寄贈量である。この堀直格旧蔵本は後に《内閣文庫》に入ったものであろうか。筆者はこれを一部調査している。太政官より布縮緬が下賜された、との記録が須坂市に残っている。

因みに先の寄贈者2人(直明、忠韶)の親父殿、直格と忠宝とは生前、親交があった。世代的には、朝岡興禎(1800-1856)、渋江抽斎(1805-1858)、堀直格(1806-1880)、それに高井鴻山(1806-1883、北斎後援者、信濃・小布施の有力文化人)、堀忠宝(1807-1862)等はほぼ同一世代に属する。

ところで下記の、

- ・ [A]の鴎外編の“皇室博物館書目解題”
- ・ 『改訂 内閣文庫国書分類目録 上下』(同文庫編、刊、1974-75年)
- ・ [D]の佐々木利和論文、
- ・ 『東京国立博物館蔵書目録 和書 1』(同館刊 1998年)
- ・ その他、皇室本他に関する幾つかの図書、論文、などを熟覧し、関係づければ、明治草創期以後の幾つかの公的な大コレクションがどのように集合・分割の後、再構築されていたのかが、つまり蔵書コレから考察した博物館/図書館/資料館等の思想が判然となり、その思想論は面白いテーマになるのではなかろうか。

『東京国立博物館百年史』(同館刊 1973年)の編集に関わったという故村内政雄氏の晩年、かつて筆者と一緒に仕事をした折に、‘森鴎外は、同館総長時代、朝早く出勤し、門前の緑陰で、読書をしながら開門を待っていて、守衛さんをいつもながら慌てさせた’という逸話を伺った(参考：鴎外自邸の観潮楼：団子坂上～谷中～上野の山間の距離は約1,600m：筆者)。

編者がどのような経緯で前記のような目録化の仕事に

到ったのか、勤務日、非番日の業務はどうだったのか、など、1,200タイトルにも及ぼうとする目録誌の採録、編集の意図を、黄泉の国の林太郎邸に尋ねに行きたいものである。中学時代の筆者は、同氏の旧邸跡を通り抜けて通学したというご縁(?)があり、『鴎外全集』編者の1人・澤柳大五郎教授の不肖の弟子でもあり、既に筆者も鴎外氏の享年を超えていることにもよる故にである。

以上、表記は現在の常用漢字にて。

(えこういん・はく) 

## 東京都写真美術館図書室 OPAC

公開(<http://tokyophotomuseum-library.opac.jp/>)

来代 紀子

### Web版OPACの公開について

東京都写真美術館図書室(以下、「図書室」という)は、1995年、東京都写真美術館の総合開館と同時に、写真・映像に関する情報センターとして開室した。この10年の間に、国内及び海外で出版された写真集をはじめ、写真関係の展覧会カタログ、評論集、技法書、写真史・映像史に関する図書、専門雑誌など、収集を続け、現在では、その数は、図書が約28,000冊、逐次刊行物が1,000タイトル以上にのぼる。

図書室は、今年(2005年)4月14日より、蔵書目録のインターネット公開を開始した。開室当初から、館内では、コンピューターによる蔵書検索が可能となっていたが、インターネットの時代を迎え、多くの図書館がOPACを公開する中、その利便性を感じつつも、なかなかその機会を得られずにいた。公開に至るには、図書室以外の美術館スタッフの理解も必要であり、今回、幸いにも様々な協力を得ることができ、折しも開館10周年という記念の年に、OPACネット公開への一歩を踏み出すことができた。当館では収蔵作品と同一のシステムで図書室の資料も管理しており、その館内システムから図書室の資料の書誌情報を取り出し、Web版OPACに取り込むという形で公開を行った。今後は、現在は検索対象となっていない逐次刊行物の公開をはじめ、より充実したWeb版OPACを目指して努力していきたい。ご意見、ご感想など頂戴できれば幸いである。これまで当館図書室は、比較的、写真や美術愛好家の方々を中心にその存在を知られ、ご利用いただいていたように思わ

れるが、OPAC の公開によって、また将来的に横断検索にも参加することで、図書館ユーザーをはじめ、まだ当館図書室をご存知ない方にも、その存在を知っていただく、また図書室を通じて写真美術館を知っていただくことができるでしょうということである。

### 図書室について

実際に、図書室はどのように機能しているのだろうか。現在、土日祝日を含む年間約 300 日開室し、どなたにでも無料でご利用いただいている。当館では、図書室の写真集などの出版物も、写真のオリジナルプリントと同様、1つの作品ととらえ、当館や他館の展覧会に作品として展示される機会もあるため、オリジナルの状態を保つよう、取り扱い、保存の面で特別な配慮をしている。広く一般の利用に供する一方で、ほとんどの資料は、閉架書庫の中に保管され、利用は閲覧請求方式で、館外貸出はしていない。

図書室を当館学芸員が利用する場合を例とすると、まず、学芸員が日頃の調査研究・展覧会の構想を練る段階で、図書室の資料が活用される。その資料からインスピレーションを受け、新たな研究テーマ、展覧会の企画が生まれる。今年 4 月から開催中の 4 部構成で写真の歴史をたどる開館 10 周年記念コレクション展のように収蔵作品で行われる展覧会の場合、図書室では収蔵作品に関する資料の収集に努めているため、蔵書が学芸員の大きな助けとなる。次に、順調に企画が通った場合、今度は展覧会準備の段階で図書室の資料が役立つことになる。様々な打ち合わせの場面や、カタログ制作、また、論文の参考文献に活躍する。やがて、展覧会の開催を迎えると、図書室の資料が展示室に出品される。展示されるには及ばなかった資料であっても、図書室内の開架の特別コーナーで展覧会関連図書として、利用者の注目を浴びる機会を得る。最後に、開催された展覧会のカタログ自体が新たに図書室の蔵書に加わる。この新しい資料がまた別の誰かのインスピレーションの源となる。

今回は当館の学芸員を例にしてみたが、当館学芸員を他の利用者にも、置き換えることができる。図書室で、写真について知識を得た人々が、やがて写真家となり、編集者となり、展覧会の企画者となり、図書を出版し、それがまた図書室のコレクションとして戻って来れば、当館にとってこれほどうれしいことはないだろう。

図書室は、研究者レベルの要求にも応えうる専門図書館であるが、利用者にとっては、親しみやすい、気軽に立ち寄れる存在でもあるようである。研究者、学生以外に、マスコミ、広告、ファッション関係者の利用も多い。恵比寿ガーデンプレイスという国際色豊かな土地柄、また、写真集は日本語がわからなくても、あるいは外国語がわからなく

ても楽しめるため、図書室を訪れる人々の話す言語も様々である。座席数 18 席の小さい図書室ではあるが、オシャレをしてその日初めて恵比寿にやって来た若者から、常連の地元の紳士まで、それぞれの楽しみ方を見つけていただいているようである。

「美術館冬の時代」において、来館者が増え続けている当館であっても、美術館を取り巻く状況の厳しさは例外ではないが、今回、OPAC ネット公開への一步を踏み出すことができたように、この 10 年の積み重ねをもとに、これからも写真・映像文化の世界の孵卵器となるべく取り組んでいきたい。

(きただい のりこ 東京都写真美術館)



## ポーラ化粧文化情報センターの紹介

富澤 洋子

ポーラ化粧文化情報センターは 2005 年 6 月 15 日、化粧に関する展示と資料閲覧の施設として銀座にオープンしました。母体となっているポーラ文化研究所は 1976 年の設立以来、「化粧・女性・美意識」をキーワードに東西の化粧史およびその周辺分野、各時代風俗や美人観から現代女性の美意識までを含む化粧に関わる幅広い研究活動を行い、その成果は書籍の出版や展示として発表してきました。活動に際して収集してきた資料には、古代から現代へと続く化粧史を知る上で貴重なものも数多くあります。

化粧文化情報センターは化粧道具など現物資料を紹介する「化粧文化展示室」と文献資料の閲覧コーナー「資料閲覧室」の 2 つの機能を持っています。「化粧文化展示室」は情報センターを開く以前から、毎回テーマを決め「化粧」を様々な角度から紹介するという活動を行っており、今期で 10 期目を迎えます。最近では明治期の美人写真集や近世から近代にかけての髪型の流行について展示を行いました。今年は西洋の髪型や化粧に関する書籍のうち、主に 19 世紀に刊行されたものを紹介しています。また、展示以外の化粧道具を見たいという声に答えるために、主な所蔵品を国内外・分野・時代別に検索して、画像と解説を見ることができるデータベースも公開しています。

「資料閲覧室」で閲覧できる資料は 17? 19 世紀の東西の化粧・髪型・装身文化に関する書籍と 20 世紀以降の化